

2025年度 学校評価アンケート（所感）中学校

本校では、教育活動の質向上とより良い学校づくりをめざし、毎年「学校評価アンケート」を実施しております。この度、令和7年度の調査結果がまとまりましたので、ご報告申し上げます。

保護者の皆様には多大なるご協力をいただき、回収率は80.7%に達しました。深く感謝申し上げます。

この報告書では、昨年度（令和6年度）の結果との比較、および「生徒・保護者・教員」の三者視点による多角的な分析を通じ、本校の現状と次年度の展望を明らかにすることを目的としています。

今年度、最も顕著な成果を上げたのは「運動会（Q8）」です。保護者の肯定度が前年度比で14.3ポイント向上しており、学校行事の盛り上がりやその内容が家庭からも高く評価されています。また、生徒の「部活動（Q7）」に対する満足度も向上（3.5ポイント増）しており、放課後活動が学校生活の充実感を支える大きな要因となっています。

一方、「生徒会活動（Q10）」においては、生徒の肯定率が10ポイント以上急落した一方で、保護者の評価は6ポイント向上するという「認識の逆転」が起きています。これは、生徒会行事の「見映え」や「発信力」などの外向けの発信力が向上した反面、運営プロセスにおいて生徒の主体性が十分に発揮されていない、あるいは一部の生徒に負担が偏り、一般生徒が「自分たちの活動」という実感を失っている可能性を示しています。

また、「生活規律の指導（Q12）」については、生徒の肯定率が6.2ポイント低下しており、指導基準のあり方や、学習サポート（Q4）の評価低下と連動した支援体制の再検討が必要な時期に来ています。

今回の分析で最も注目すべきは、「教員の自己評価」と「生徒の実感」の乖離です。

「建学の精神（Q1）」「相談のしやすさ（Q6）」「心身の健康対応（Q18）」「学校満足度（Q20）」の4項目においては、教員・保護者の肯定度に対し、生徒の肯定度が15～22ポイント下回る大きな認識差が見られます。これは、学校側の「体制は整っている」という自負が、生徒側には「お題目（形式的）」「心理的な距離」「日常的な窮屈さ」として受け取られている可能性を示唆しています。学校側が提供している支援や理念が、生徒一人ひとりの内面的な満足や安心感にまで十分に届いていない現状があり、今後はシステム（制度）の構築だけでなく、生徒の実感に寄り添った「実質的な関わり」の強化が急務です。

一方で、「教育内容への満足度（Q2）」と「進路情報の提供（Q13）」の2項目では、教員自身の評価よりも生徒の肯定率が約10ポイント高い結果となりました。これは、現状に満足せず「より質の高い教育を届けたい」と願う教職員の真摯な姿勢が、生徒には「手厚い支援」や「魅力的な授業」としてしっかりと伝わっている証拠です。教員側が「まだ改善の余地がある」と厳しく捉えている部分こそが、実は生徒にとっての大きな安心感や学校への信頼に繋がっており、本校の教育力を裏付ける確かな強みとなっていることが伺えます。

これらの結果を真摯に受け止めた上で、次年度は以下の3点を重点課題として取り組んでまいります。

(1) 評価が急落した生徒会活動に対し、生徒が企画・運営に関わる裁量権を拡大します。行事の見映えだけでなく、プロセスそのものを生徒に委ねることで、「自分たちの学校を自分たちで動かしている」という実感を持たせる取り組みを推進します。

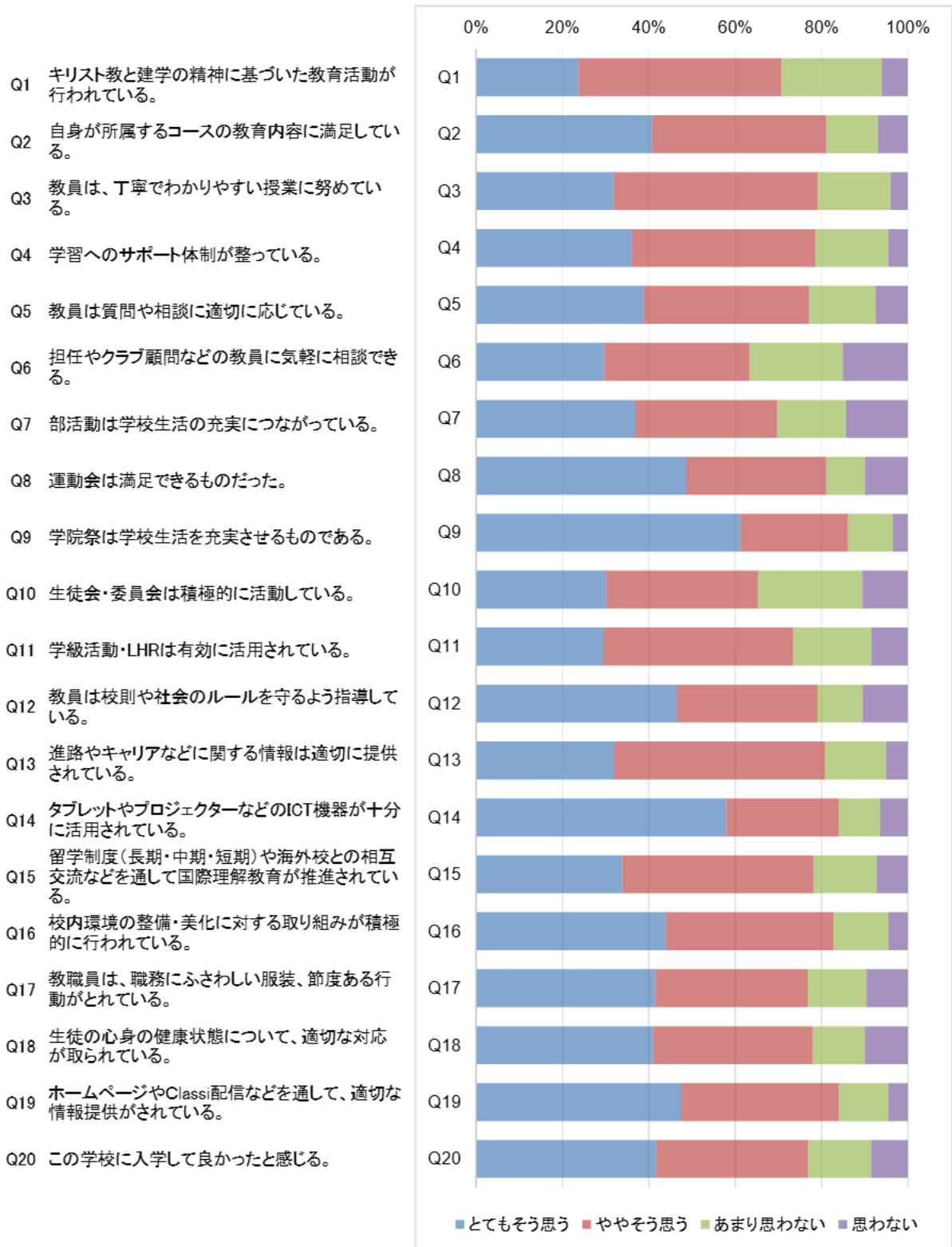
(2) 評価の低下が見られた学習サポート体制については、「体制がある」ことを周知する段階から一歩踏み込み、Classi等を活用して個々の習熟度に応じた支援メニューを具体的に提示します。生徒が「自分のために助けてくれている」と実感できる、個別最適化されたサポート体制を再構築します。

(3) 日常的なコミュニケーションの活性化については、教員と生徒間の認識差を埋めるため、フォーマルな面談以外に、日常的な対話の機会を創出します。例えば、生徒の生活記録へのフィードバック、生徒の心身の健康状態に配慮した細やかな声掛けなど、心理的な距離を縮める仕掛けを強化し、相談しやすい環境づくりを徹底します。

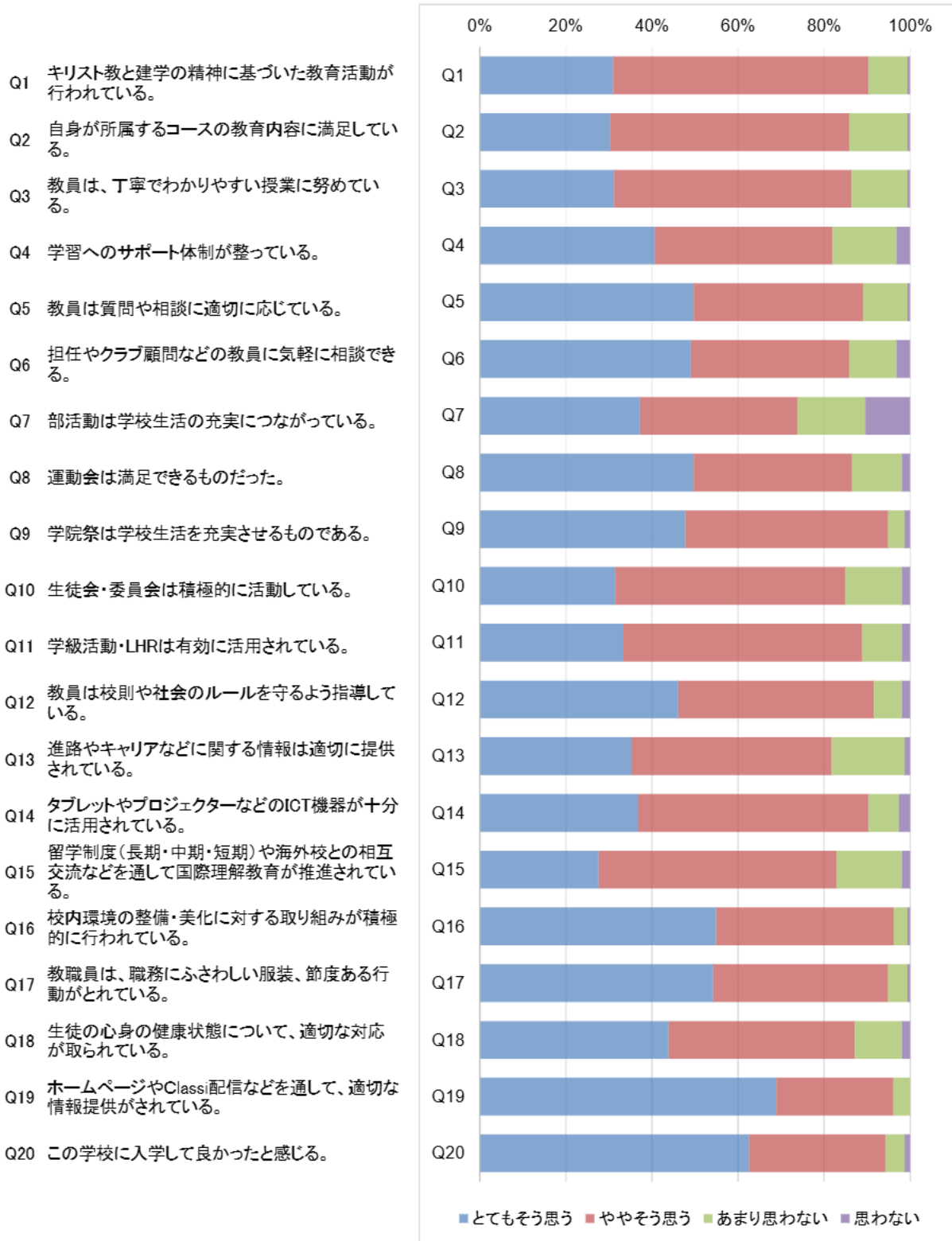
本校は、皆様からの声を指針とし、「和と善」の建学の精神に基づいた教育活動の更なる充実に努めてまいります。今後とも変わらぬご理解とご協力をお願い申し上げます。

以上

学校評価アンケート 中学校(生徒)



学校評価アンケート 中学校(保護者)



学校評価アンケート 中学校(教員)

